

# 石井十次



日本で最初に孤児院を創設した人物であり、「児童福祉の父」と言われている。

慶応元年(1865年)4月11日、宮崎県に生まれ、幼名を萬十郎のち十次と改めた。明治20年、四国巡礼帰途の母親から男児を1人預かったのをきっかけに、孤児救済事業を始める。寺の一面を借り、「孤児教育会」(後に「岡山孤児院」と改称)の看板を掲げた。

医学への思いも断ち切れずにいた十次は、明治22年、「人は二主に仕ゆること能わず」との聖句に従い、医書を焼き医学校を退学。この時、児童福祉・教育に専心する覚悟を決める。十次23歳の時であった。

明治24年、名古屋地方を襲った濃尾地震による被災児93名を救済。

明治39年、東北地方一帯の冷害による大凶作により、多くの農家が破産、離散状態となった。

この被災地救済に着手し6回に分け計825名を岡山に送り保護した。その年の院児数は1200名に達した。

明治26年「風琴音楽隊」を設立。明治31年には「音楽幻燈隊」を編成し、幻灯や活動写真で院内の様子を説明し、最後に寄付をお願いするようにした。この演奏旅行は、国内はもちろん、朝鮮半島、中国、香港、台湾、遠くはハワイ、アメリカ西海岸までも行き、明治41年まで続いた。

その後、茶臼原の地で農業的労作教育を柱にした「散在的孤児院」(里親村)を作ろうと決意し、やがて「時代教育法」(「幼児は遊ばせ、子は学ばせ、青年は働かせる」)を編み出した。また茶臼原の原野を開墾し、岡山から茶臼原に全院を移して、自然の中で自由に遊び学ばせる一大ユートピアの建設に取りかかった。

明治31年、「岡山孤児院尋常高等小学校」を設立し、午前は勉強、午後は将来社会に出た時の役にたつように実践教育(大工・左官・散髪・印刷・製本・機織り・裁縫など)を行い、実習した。明治39年、英国のバーナードホームにならって院内において「家族制度」を実施した。主婦(保育士)を中心に子ども十数人が一緒に暮らす小さな家を次々に建築した。

エミールを読み、大自然がたくさんある茶臼原で、子どもたちを自由に遊ばせ、学ばせ、働かせたいと考えていた十次は明治27年、院児60名を宮崎県西都市茶臼原に送り開拓に着手。開墾した畑には米、麦、大豆、そば、いもなどを作り桑を20万本植えて養蚕を始めた。やがて繭から生糸を紡ぐ作業が盛んになり、十次の描いていた理想の暮らしができるようになっていった。

明治39年には、茶臼原に農業小学校が設立(後大正2年私立茶臼原尋常小学校となる)。明治45年、茶臼原を「岡山孤児院分院茶臼原孤児院」と称し、岡山には里子だけを残して全移住完了。

石井十次は、これらの院児が成長したら茶臼原に植民させ、その彼らに里親になってもらおうと考えた。それが実現すれば、キリスト教精神を基盤とした理想的農村共同体ができるはずであった。

大正3年1月30日午前11時頃、初孫 児嶋琥一郎が生まれたと電報が来た。それを聞いた十次はわずかに頷き、同日午後2時すぎ、志なかばにして倒れる。48歳であった。